

マルチュク青春通り

2005(平成17)年8月22日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本＝ユ・ハ／出演＝クォン・サンウ／ハン・ガイン／イ・ジョンジン／パク・ヒョジュン／キム・インゴン／イ・ジョンヒョク／ソ・ドンウォン／チョン・ホジン／キム・ブソン（東京テアトル配給／2004年韓国映画／118分）

……韓国では『ブラザーフッド』（04年）に次いで、2004年の年間興行収入2位に輝いた作品だが、前宣伝に反して、一貫して煮えきらない中途半端な主人公の姿にはイライラの連続……？ 同じ学園モノでも『マイ・ボス マイ・ヒーロー』（01年）や『品行ゼロ』（02年）の方が圧倒的に面白い！ 今や「韓流四天王」をしのぐイケメンNo.1俳優クォン・サンウの魅力を全面に押し出しているが、その出来はB級品……？ 内容の乏しいパンフのバカ高さを含めこんな売り方をしていれば、韓流ブームもそのうちそっぽを向かれるのでは……？

学園モノ3題比較

この『マルチュク青春通り』は今や「韓流四天王」をしのぐ人気No.1のクォン・サンウが主演しているため、韓流ブームに乗って話題を呼んでいる。そして韓国でも2004年の年間興行収入2位に輝いた作品とのこと。しかし私が観た限りでは、同じ韓国学園モノとしては『マイ・ボス マイ・ヒーロー』（01年）や『品行ゼロ』（02年）の方がいい出来……。

1970年代、80年代の韓国の学園モノが面白いのは、その時代の韓国の高校生活の特徴が真正面から描かれているから。その特徴とは、①教師は絶対に反抗不可、②教師による体罰や鉄拳制裁オーケー、③学歴社会と大学受験の厳しさ、④留年あり、⑤番長制（？）あり、など……。

時代は1978年

『品行ゼロ』は1980年代が背景だったが、この『マルチュク青春通り』は1978年と時代を特定。この時代は朴正熙パク・チョンヒの軍事政権下にあり、高校の中にも軍人のお目付け役(?)が存在していた時代。そして映画スターは、ブルース・リーの全盛時代。男子高の生徒たちがブルース・リーに憧れ、そのマネをしていたのは当然で、テコンドー道場を経営する父親をもったヒヨンス(クォン・サンウ)もその1人。しかし……?

マルチュク通りの男子高は?

ブルース・リーに憧れる主人公のヒヨンスは、新興住宅地のカンナムに引っ越してきた高校2年生。父親はテコンドーの師範で人格者とされていたが、実は学業もテコンドーも精神を統一して励めば上達すると叱咤激励するタイプ。したがって厳格そのもので、鉄拳制裁も……。

そんなヒヨンスが転校してきたマルチュク通りの男子高は、1978年の朴正熙パク・チョンヒの軍事政権下ということもあって前述のような特徴をもっていたが、その様子は、『マイ・ボス マイ・ヒーロー』や『品行ゼロ』で描かれるものとはほぼ同じ。そのうえ、ヒヨンスが入ったクラスは成績がビリの連中の溜まり場だった……。

どっちつかずのヒヨンス

ヒヨンスのクラスには次のようなヘンな連中たちが……。すなわち①生徒たちにエロ本を売ってセコく金を稼いでいるジェボク(パク・ヒョジュン)。彼のあだ名はハンバーガーだが、それはデッカイ顔からきたもの……? ②キレると相手をボールペンで刺すというコワイ留年生のチクセ(キム・イングォン)、③父親が軍の指揮官であるため教師からエコひいきされているソンチュン(ソ・ドンウォン)、④クラスのボスの存在で1番ケンカの強いウシク(イ・ジョンジン)。

このウシクは、3年生の風紀部長のジョンフン(イ・ジョンヒョク)が番長として君臨していることにコトあるごとに反発していたが、ヒヨンスはどっちつかずのまま……。

ヒヨンスとウシクが親友に

成績の良かったヒヨンスは、こんなクラスの中でしばらくは1人孤高を保っていた(?)が、ある日バスケの試合で大活躍したため、ヒヨンスはウシクから認められ、ウシクの仲間の1人に。というよりもウシクの親友という立場になった。さて、これからの物語の展開は……?

煮え切らないヒヨンス

ある日ヒヨンスやウシクたちがバスの中で見かけたのは、オリビア・ハッセーによく似た(?)美人女子高生のウンジュ(ハン・ガイン)。しかしヒヨンスは遠くからこれをじっと見つめるだけで行動力ゼロ。逆に積極的だったのはハンバーガーやウシク。ある日バスの中で絡まれていたウンジュを助けたのもウシク。そして何事も先手必勝(?)とばかり、オンナに対しても積極的なウシクはついにウンジュをゲット……? しかしヒヨンスはそれを遠くから見つめているだけ……。この煮えきらないヒヨンスの行動にはつい私もイライラ……?

ディスコでダンスをしながら熱いキスをかわす2人を見て、落ち込んだヒヨンスは1人トッポッキ屋へ。すると前々からヒヨンスのことを気に入っていた店の女主人(キム・ブソン)は露骨にヒヨンスを誘惑……。ところが、さあいよいよ(?)という段階になると、ヒヨンスはここからも逃げ出す始末。何とも情けない奴だ……?

ちょっとヘンな三角関係……?

高校の中でくり広げられる高校生同士の権力闘争(?)においても、女の子ゲットの闘い(?)においても、ウジウジ派のヒヨンスに対してウシクは積極かつ果敢、この姿を見ているとウンジュがウシクに惹かれたのは当然……? 私が見ても、ヒヨンスよりウシクの方がよほど魅力的……?

しかしこんなウシクは、真面目で優秀タイプの女の子とはもともと相性が良くないはずで、アレコレと口うるさいウンジュとはやがてケンカ別れ……? そりゃ仕方ないが、そこでにわかに関きだしたのがヒヨンス。カサやギターそしてラ

ジオを小道具(?)にモーションをかけたところ、ウンジュも……?

3年生のウンジュは大学受験を控えて勉強に専念しなければならないはずだが、ウシクと別れた後は、ヒヨンスと2人でハイキングに行ったりして結構遊んでいる感じ。これでは大学受験はムリでは、と心配していると案の定……? ウシクはジョンフンとの「男の決闘」で敗北した後、男らしく(?)姿を消してしまっただが、ヒヨンスやウンジュのやっていることは何となく中途半端。私の目にはヘンな三角関係(?)にしか見えないが……?

ある日突然大変身のヒヨンス

ウシクがジョンフンとの決闘に敗北した後、学校内の勢力分布が大きく変わったのは当然で、ウシクの親友だったヒヨンスの立場は一層みじめなものに……。そんな中、ヒヨンスは突然ブルース・リーに大変身するべく、一大決心を。父親がテコンドーの道場を経営しているのだから恵まれた境遇にあるのは事実だが、父親の教えも請わないまま、1人黙々と練習を続けていたらメキメキと実力がついてきた。これによって、それまでウジウジしていたヒヨンスも筋肉隆々となり、自信満々の面構えに……。そりゃクォン・サンウをカッコよく売り出そうとすればそれはいくらでも可能だろうが、いくらなんでも、こんな短期間での実力向上はちょっとマンガ的……?

ジョンフンとの決闘は……?

この映画のハイライトは、ウシクが敗北を喫した屋上でのヒヨンスとジョンフンとの決闘シーン。もちろん、その結果は十分予想できるものだが、このシーンは『マイ・ボス マイ・ヒーロー』や『品行ゼロ』での決闘シーンと同じような雰囲気、高校生同士のケンカとはとても思えないほどの迫力が……。もっともその結果、多数のケガ人を出したのだから、「傷害罪」の適用は必至だし、退学も当然の処分と思われる。さてその成り行きは……?

そして今は……?

このようなハチャメチャな高校生活を送ったヒヨンスやウシク、そしてハンバ

ーガーたちの今は……？ さらにウンジュは無事大学受験に成功し、今はどんな生活を送っているのだろうか？ それは映画を観てのお楽しみだが、くり返して言うておきたいのは、1978年という時代設定。くれぐれもこの時代設定をよく頭に入れたうえで、この映画を楽しんでもらいたいのだ。

こんなバカ高パンフレットはナンセンス！

私は映画鑑賞の際には、必ずパンフレットを購入しているが、その内容と値段を見て満足できるものもあれば、納得できないものもある。といっても、そのほとんどはまずまずのバランスとなっている。しかし、この映画のパンフは1000円という値段の割に内容が乏しく、バランスがとれていない典型！

ピンクのケースに入り、ゴムひもで結ばれたおしゃれな外観だが、その中には人気No.1俳優クォン・サンウのプロマイドやシールが入っている。しかし、肝心の映画の紹介については、① INTRODUCTION、② STORY、③ CAST、④ Kwon Sangwoo、⑤ INTERVIEW、⑥ CREDIT を記載したA5の6枚の紙だけ。1000円もするパンフレットには、普通少なくとも2、3名の映画評論家の面白い解説が入っているものだが、それも全くなく、ホントに最低限の情報のみ。これで1000円とはポッタクリ……！

やめてほしい最初のごあいさつ

この映画をクォン・サンウの人気で売っていかうとしていることは、パンフレットへの押し売りのプロマイドやシールの同封とともに、映画本編開始前にクォン・サンウがスクリーン上に登場してごあいさつするところにもミエミエ。そのうえ、クォン・サンウは投げキスまで……。韓流ブームに乗って映画館に足を運ぶオバちゃんたちはこれに大喜びするのかもしれないが、こんなやり方は明らかに邪道！ 平成17年8月21日付産経新聞は、「韓流映画 ブームに水？」「買い付け額急騰 “不発” も多く……」との見出しで今秋上映されるペ・ヨンジュン主演の『四月の雪』の日本での買い付け価格が7億3500万円とバカ高になっていることを報じ、警鐘を鳴らしていたが、そんなこんなを見ていると、そろそろ韓流ブームも落ち目になるのでは……？

2005(平成17)年8月23日記